

子どもたちの豊かな仲間意識を育むために

—異学年集団での活動を生かして—

いの町立川内小学校 教諭 広瀬 紀一

子ども一人一人の自己有用感の向上を目指し、異学年集団での交流を中心としたピア・サポート活動の実践研究を行った。その中で、児童の特技や趣味が様々な場面で発揮できる活動を継続的に実施していくことが、特に上級生の自己有用感の向上において効果的であることが分かった。また、上級生と下級生を1対1のペアとする活動から多人数での活動へと発展させるなど、両者のかかわり合いを段階的に高めていくように構成することも重要であった。加えて、これらの成果をもとに、自己有用感を高めることを目指した異学年交流活動の年間活動計画を作成した。

キーワード：異学年集団活動、ピア・サポート活動、自己有用感、かかわり合い、異学年交流年間活動計画

1 はじめに

学校内外での様々な活動によって成長していく子どもたち。子どもたちにとって、異年齢の仲間との活動は、人とのかかわり方や生活の知恵などを吸収する貴重な場である。しかし、近年、テレビゲームに代表される遊びの変化、核家族化などの影響により異年齢での交流の機会が減り、その中で得られる貴重な学びも大きく減少している。また、このような傾向により子どもたちの対人関係の希薄さや社会性の未熟さが、対人関係を結ぶ力の弱さとして現れ、学校でのいじめや不登校の大きな要因となっている。したがって、学校生活に上手く適応できない子どもたちにとっては、対人関係を結ぶ力を高めていくことが必要不可欠なこととして挙げられる。対人関係を結ぶ力を育てる方法として、異学年集団での交流活動が有効であると考え、異学年の仲間との交流を通して友達や教師から認められ、頼られる存在だと感じることを、望ましい対人関係を結ぶ大きな力となる。

このように、異学年間での豊かな活動を組織し、定着させていくことは、子どもたちの仲間意識を育てると共に楽しく学びの多い学校づくりに大きな役割を果たすものであると考え、本研究に取り組んできた。

2 研究目的

- (1) 異学年集団での活動を通して、子ども一人一人の自己有用感を高めるにはどのような活動を組織したらよいか実践を通して明らかにする。
- (2) 異学年交流活動実施後の子どもたちの自己有用感はどのように変容したのか考察する。

3 研究内容

- (1) 基礎研究
 - ① ピア・サポート活動とは
 - ② ピア・サポート活動の分類
 - ③ 本研究の進め方
- (2) 実践研究（授業実践）
 - ① 社会的スキルトレーニングの実際
 - ② 異学年集団活動の実際
(かかわり合い・育ち合い)

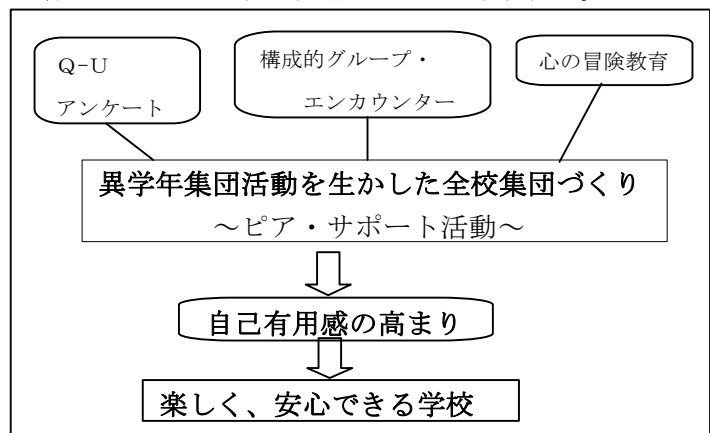


図1 基本構想図

4 研究

(1) 基礎研究

① ピア・サポート活動とは

ピア・サポート活動とは、子ども同士が自主的に支援（サポート）し合うことによって、問題解決や自己実現への歩みを促す活動である。したがって、このピア・サポート活動は、よりよい仲間づくりや楽しい学校づくりなどに大きな役割を果たすものである。

② ピア・サポート活動の分類

ピア・サポート活動の分類や形態においては、研究者や教育現場での実践者によって捉え方に違いが見られ、統一したものは見られない。これは、場所（地域、学校など）や世代（学年、年齢層など）が違えば、課題やねらいが異なってくるので当然のことと言える。

その中でも、多くの学校などで行われているのが、仲間づくり、お世話活動、相談活動の三つと言えるであろう。分類においては、多様な活動内容を含むものとして下の図を紹介する。

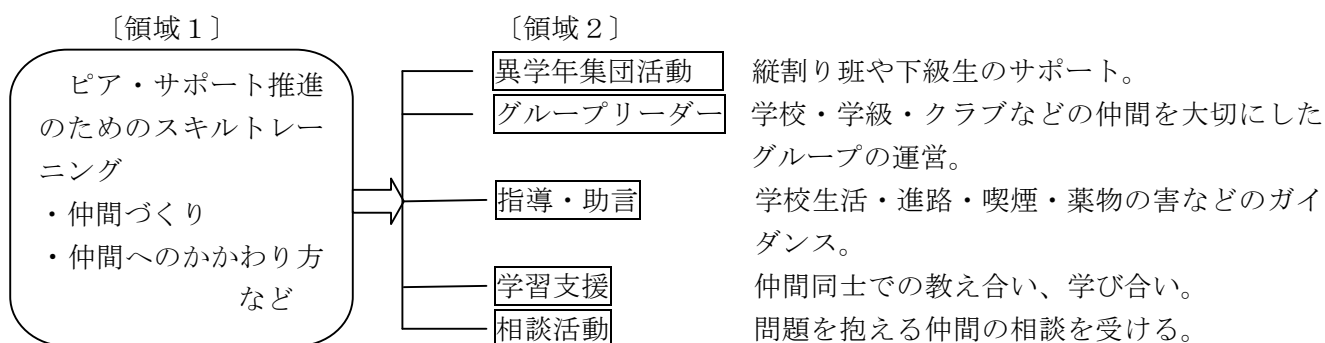


図2 ピア・サポートの系統と分類（『すぐ始められるピア・サポート』菱田準子著 2002・ほんの森出版を改編）

③ 本研究の進め方

小学生の発達段階を考えると、領域2に位置づけられる児童が児童の相談に応じること（相談活動）は現実には難しい面が多い。また、小学校においてはスクールカウンセラーなどのスーパーバイザーの確保も十分ではない。したがって、本研究では、小学校の低学年から高学年までが一つとなって活動できるものとして異学年集団活動を中心に位置づけ、取り組んできた。

その際、1年生と6年生の交流活動をモデル事例として研究実践を進めていく。その理由は、大きく二つある。一つ目は、この組み合わせであれば年齢差を最大限に生かした多様な活動が組織できることである。二つ目は、6年生にとって「自分たちは最高学年である」という自覚のもとに異学年活動への動機づけを与えやすいことである。6年生は最高学年であるため、下級生への影響力が最も大きい。そのため、6年生が育つことが下級生も育つという間接的な効果を生む。

(2) 実践研究（授業実践）

① 領域1…社会的スキルトレーニングの展開

表1 社会的スキルトレーニングの実践

	日時	授業時間	クラス	題材・ねらい
仲間づくり	実践授業 6月7日（火）	3時間目 （学級活動）	1年生	「ゴリオニゲーム」 活動を通して友達との信頼関係を深め、学級全体の支持的風土を高める。
	実践授業 6月7日（火）	4時間目 （学級活動）	6年生	「無人島SOS」 友達の多様な考え方に気づき、お互いを認め合える人間関係を築く。

仲間づくり	実践授業 6月24日(金)	3時間目 (学級活動)	5年生	「共同絵画」 自分の持っている情報を正しく伝え、友達と協力しながら活動する喜びに気づく。
	実践授業 6月24日(金)	4時間目 (道徳)	2年生	「友達っていいな」 友達の良さに気づき、仲良く学校生活を送っていかうという心情を育てる。
	実践授業 7月8日(金)	2時間目 (学級活動)	3年生	「お話アドジャン」 友達の多様な面に気づき、多くの人とかかわりを深めようとする気持ちを高める。
	実践授業 7月8日(金)	3時間目 (学級活動)	4年生	「地球を救え」 体験活動を通して、お互いを認め合える人間関係を築く。

《領域1を振り返って》

- 5月に実施したQ-Uアンケートの結果をもとに、学習内容を決定し、各学年で1時間以上の授業を実施した。Q-Uアンケートにより、学級の状況や課題を客観的に捉えることができたので、実態に即した授業内容を構成することができた。
 - 1年生と6年生においては、対人関係の結び方（語りかけ方など）の要素も取り入れた。この結果、2学期からの異学年交流活動へとスムーズにつなげるための基礎的なスキル習得ができた。
 - 友達の多様な見方や考え方に気づくことができたという感想が多くの子どもたちから語られた。これらの授業が、2学期以後の交流活動への一つのステップとなったと考えられる。
- ② 領域2…異学年集団活動の展開（かかわり合い・育ち合い）

表2 異学年交流活動の実践

	日 時	授業時間	クラス	題 材・ね ら い
異学年交流活動	事前授業 10月18日(火)	2時間目 (学級会)	6年生	『1年生と楽しく触れ合うために』 わんぱくフェスティバルに向け、1年生と有意義に交流するための計画を立てる。
	検証授業① 10月27日(木)	3・4時間目 (学級活動)	1年生 6年生	『わんぱくフェスティバル』 1年生と6年生の異学年活動を通して、交流することの楽しさを実感する。
	事前授業 11月16日(水)	5時間目 (学級会)	6年生	『1年生のヒーローになるために』 ふれあいフェスティバルに向け、自己の紹介コーナーの進め方を考える。
	検証授業② 11月24日(木)	3・4時間目 (学級活動)	1年生 6年生	『ふれあいフェスティバル』 6年生が一日先生となる交流活動を通して、兄弟学級としての絆を深める。
	事前授業 1月16日(月)	3時間目 (学級会)	6年生	『1年生に思い出の1時間をプロデュースしよう』 思い出フェスティバルに向け、1年生と共同制作をする際の進め方について考える。
	検証授業③ 1月18日(水)	3・4時間目 (学級活動)	1年生 6年生	『思い出フェスティバル』 異学年交流活動の締めくくりとして、グループで協力して思い出となる楽しい活動を進める。

表3 ふれあいフェスティバルの活動

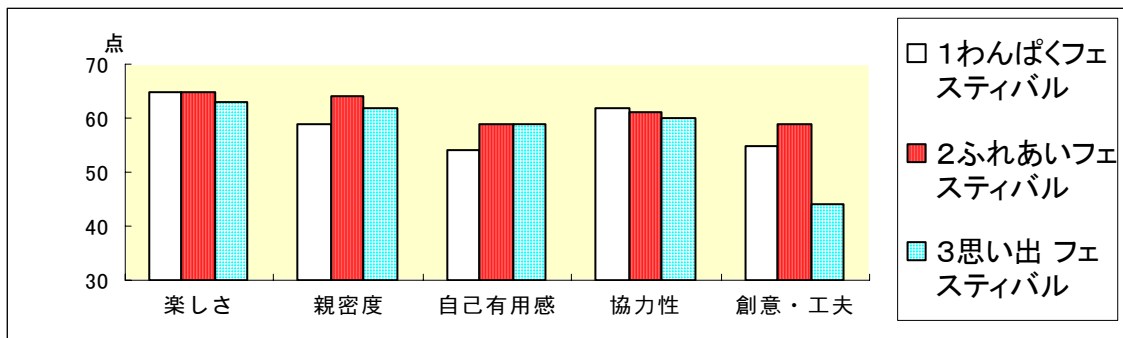
	内 容	備 考	担 当
10:45～	はじめのことば (6年) 体育館	班ごとに並ぶ (6年生→1年生→6年生)	T1
10:50～	グループ内での自己紹介	名前、趣味など	全
10:55～	グループのめあて・活動計画の確認	班長より (活動計画表を参照しながら)	全
11:00～	1・6年生の交流活動 (1人20分間) ① 各班6年生Aの児童 ② 各班6年生Bの児童 ③ 各班6年生Cの児童 ☆ 6年生A→B→Cの順に紹介 (活動場所) ☆ 1～4班・・・6年生教室 ☆ 5～8班・・・1年生教室	6年生児童の動き (1人20分間) ①教えたい内容を告げる (例)「僕は、みんなに・・・の作り方を教えます。」 ②丁寧に、優しく教える (約15分間) ③自分の紹介についての意見を聞く (例)「僕の・・・はどうでしたか。感想を聞かせてください。」 同じ班の1年生、6年生が感想を述べる	T1～T4
12:00～	活動のふりかえり	班長が進行 (各班にワークシートを配布)	全
12:10～	おわりのことば (6年) 6年教室	班ごとに並ぶ (6年生→1年生→6年生)	T1

5 結果と考察

(1) 結果 (異学年交流活動がもたらすもの)

① 異学年交流活動を振り返って (活動後の振り返りカードより)

- ・できた…3点、まあまあ…2点、できなかった…1点として各項目を点数化 (児童数22人のため各項目66点満点)

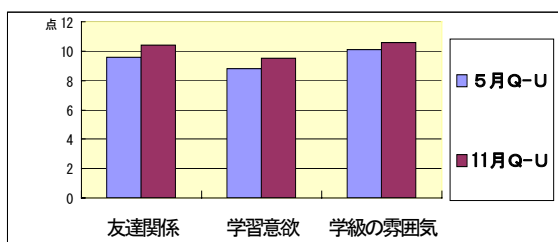


グラフ1 異学年交流活動の項目別比較

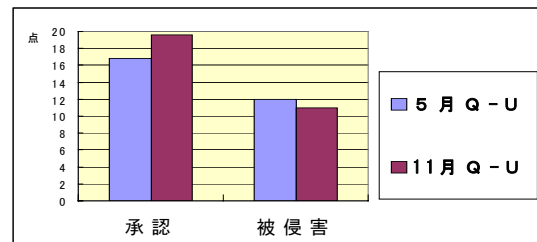
② 自己有用感の形成過程

ア たのしい学校生活を送るためのアンケート (Q-U) より

Q-U尺度における得点の変化 [縦軸は一人当たりの平均値]



グラフ2 やる気のあるクラスをつくるために



グラフ3 いごちのよいクラスにするために

イ 児童の意識の変化（Q-U「いごちのよいクラスにするために」のプロットより）

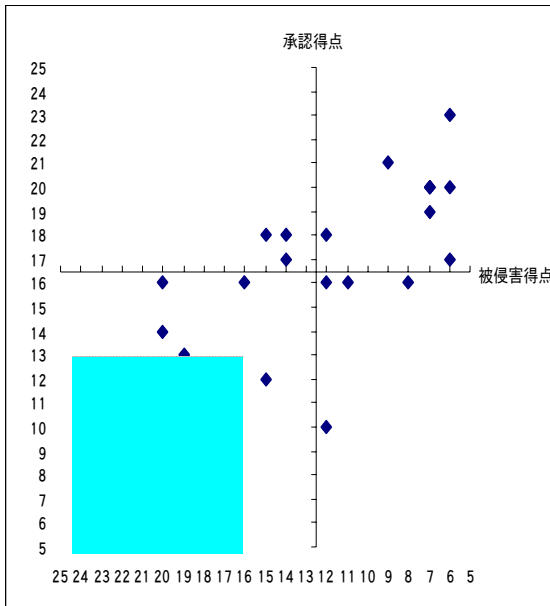


図3 5月Q-Uプロット

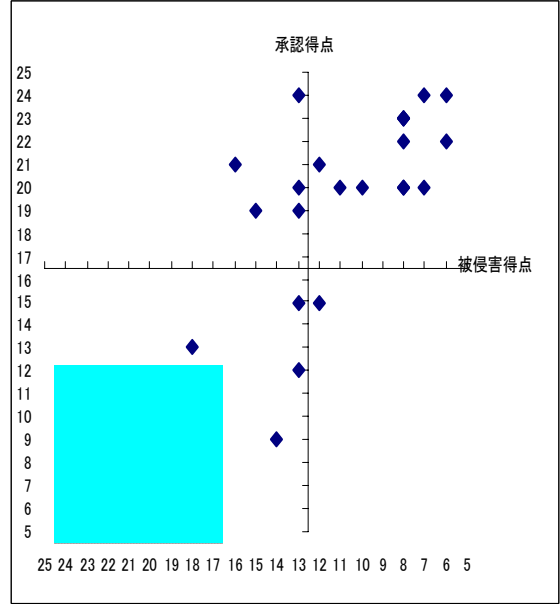


図4 11月Q-Uプロット

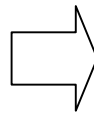
表4 活動後の感想にみられた意識の変化

内 容	キーワード	わんぱく フェスティバル	ふれあい フェスティバル	思い出 フェスティバル
①自己有用感	ありがとう 頼られた	41%	68%	63%
②友達発見	分かった 発見した	45%	46%	41%
③今後への 期待	これからは 次は	9%	45%	27%

各活動終了後の振り返り（自由記述）の中に①～③の意識と捉えられるキーワードを記した児童の学級全体に占める割合。

感想1 A児（6年生）の意識の変化

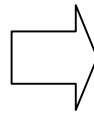
(10月)
1年生はがんばって6年生に合わせてくれようとしていて、とてもかわいかった。今日は、1年生と活動ができて、楽しかった。



(1月)
発見したことは、1年生のみんなは、とても作る時の上達が早いということです。また、こんな活動をして、1年生に頼られるような6年生になれたらいいなと思いました。

感想2 B児（6年生）の意識の変化

(10月)
6年生と1年生がとても仲良くできました。そして、1年生にボールを渡してあげたり、声をかけてあげたりすることができました。



(1月)
今日の活動で1年生にもよい思い出ができたと思います。そして、「ありがとう」や「ここどうするの」と相談もしてくれたのでうれしかったです。これからも1年生に優しい6年生としてがんばりたいです。

ウ 日常の行動に現れた変化

異学年交流活動を経て、子どもたちの日常にどのような変化が現れたのだろうか。学級担任をはじめとした実践校の教職員の聞き取りによる主な変化は次のようなものである。

- 休み時間などに6年生が1年生を積極的に誘って遊ぶ姿が多く見られるようになった。また、1年生が6年生に気軽に話しかける姿が見られるようになった。
- 6年生は自分の良さや得意なことを異学年交流活動で披露し、共通の話題ができたことにより、同学年の友達同士で語り合ったり、教え合ったりする姿が見られるようになった。
- 6年生の中には、自分の行動が下級生に喜ばれたことで自信を深め、将来は「先生になりたい」とう希望を持つ子どもも現れた。

(2) 考察

① 異学年交流活動（グラフ1）において

各活動（各フェスティバル）を分析してみると、全活動において楽しさ・親密度・協力性の項目において高い数値を示し、ほぼ全員の児童が満足していることが分かった。

また、創意・工夫の項目においては、個人活動の要素を多く含んだ活動（ふれあいフェスティバル）が高い満足度を示している。これは、「ふれあいフェスティバル」の特質として個人の力を精いっぱい発揮できる要素を多く含んだものであったことが、高い満足度を示したのだと考えられる。一方、グループ合同での活動要素を多く含んだ活動（思い出フェスティバル）は満足度が、若干、低くなっている。これは、自分の思いや考えをより直接的に活動に生かすことができなかったためであろう。

② たのしい学校生活を送るためのアンケートQ-U（グラフ2、グラフ3）において

5月と11月の結果を比較すると、「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート」（友達関係、学習意欲、学級の雰囲気）の平均値は若干の増加にとどまっているのに対して、承認得点は大きな伸びを示している。これは、異学年交流活動などの取り組みにより、友達から認められていると実感する機会を多く持ったことにより得られたものと考えられる。このことから、異学年交流は子どもたちの自己有用感の高まりに大きな効果をもたらすことが分かる。また、承認得点が増加し、被侵害得点が減少傾向を見せていることから、悪ふざけや嫌がらせを受けていると感じることが減り、学校生活への安心感が高まってきていることが分かる。

③ 児童の意識の変化（図3、図4、表4、感想1、感想2）において

図3における5月時点でのプロットの傾向は、学級生活満足群＋学級生活不満足群の混合型と言える。また、境界線付近に多く位置している。これらの児童は、今後の学校生活の充実感により他の群へも移動しやすい可能性を含んでいる。

11月の図4において、学級全体のプロット構成が右上方向（学級生活満足群方向）に移動しており、主体的に学校生活を送ろうとする児童が増えてきたことが分かる。また、個人別に見ると上昇傾向を示した児童は、学級全体の約70%に達している。一方、下降傾向を示した児童は、15%ほどである。加えて、5月の時点で要支援群にいた2名の児童も、各得点が上昇し、要支援群には見られなくなっている。

表4からは、「ふれあいフェスティバル」において自己有用感が大きく向上したことが分かる。これは、前述したように、6年生の一人一人が先生として、1年生と触れ合う中で「ありがとう」という言葉に代表されるように自分の活動が1年生に喜ばれたという満足感を得る機会が多かったことによるものと考えられる。また、活動を重ねるにつれ、1年生や6年生の友達の良さを見つけること（友達発見）ができたことも、子どもたちの心に大きな安らぎと喜びをもたらせたと思われる。

また、感想1・2に示した2名の児童の自由記述（特に下線部分）においても活動を経る度に、1年生から頼られたり、認められたりすることの喜び（自己有用感の高まり）が増してきているこ

とが分かる。図4のプロットで上昇傾向を見せた児童の多くが自己有用感の高まりが認められる感想を記している。このように、異学年交流活動の継続的な展開は、子どもたちの意識の中に、「認められる喜び」や「自分への自信」などのプラスの感情を確実に蓄積してきたと考えられる。

一方、下降傾向を見せた児童の感情の変化を見ると、活動そのものに対する楽しさは感じているものの、1年生と触れ合うことから得る喜びや満足感は得られていないことが分かった。このことから、さらに6年生と1年生が1対1のペアになっての活動など、濃密な活動を設定する必要がある。また、同時に6年生個人の魅力を最大限に発揮することのできる活動を実施していくことも重要なポイントである。

6 自己有用感の育成に適した学習活動

(1) 1年生と6年生の活動を例として

これまで述べてきた異学年交流の効果と改善点から、自己有用感を高めることを目的とした「異学年交流活動プログラム」を作成した。表5は、プログラムの一例である。

表5 異学年交流の年間活動計画例 6年生用

月	活動名	活動内容	活動の場	時間
4月	こんにちは1年生	・自己紹介や室内ゲーム大会などを行い、お互いに名前を覚えて友達になる。	学級活動	1
5月	仲良し給食①	・1年生の給食のお手伝いをし、1年生と仲良く給食を食べる。	給食時	
6月	わんぱく フェスティバル	・ドッジボールなどのボール運動を1年生に優しく教える。	学級活動	1～2
7月	楽しい水遊び	・1年生と6年生がペアになり水遊びを楽しむ。	体育	1
9月	絵本を楽しもう	・朝や帰りの会の時間に1年生に絵本の読み聞かせをする。	朝の会 帰りの会	
10月	仲良し給食②	・1年生と楽しく給食を食べる。	給食時	
11月	ふれあい フェスティバル	・6年生が1日先生となり自分の特技を1年生に教える。	学級活動	2
12月	笑顔でクリスマス	・1年生とクリスマスツリーに飾り付けをし、クリスマス集会を楽しむ。	学級活動 図画工作	1
1月	いっしょにジャンプ	・1年生に長縄跳び(8の字跳び)を教え、いっしょに活動する。	体育	1
2月	思い出 フェスティバル	・グループで1年生の思い出に残る活動をプロデュースする。	学級活動	2
3月	ありがとう会食	・1年生を会食会に招待して、楽しく会食をする。	家庭科	2

(2) 5年生(6年生進級前)へのプログラム例(6年生時での1年生との交流に向けて)

異学年交流活動を効果的に継続させていくためには、5年生段階から活動を前進させていく力を備えた児童を育成する必要がある。そこで、次年度をみこして、5年生対象の活動プログラム(表6)も作成した。

表6 5年生ピア・サポートトレーニング ・期間…1～3月(3学期)全5時間

時間	活動名	主な活動内容	ねらい
1	ごちゃまぜビンゴ	・1人1人がビンゴ形式の質問用紙を持ち、全員で動き回りながら、各欄に当てはまる友達の名前を書き入れ、ビンゴの完成を目指す。	知り合う

2	ラインアップ	・誕生日や通学時間などの数値の順番に輪になるように並びかえる。	協力
3	いろいろな顔	・気持ちを表す顔の表情や言葉を絵などに表し、それぞれの気持ちについて考える。	感情の表出
4	気持ちよく聞くには	・聞き方カード（指令書）に従っていろいろな聞き方をし、聞くときの姿勢や態度について考える。	聞き方・ 伝え方
5	無人島SOS	・無人島からの脱出を目指して、その方法をグループで話し合う。	課題解決

学校の事情により、異学年交流活動等に割り当てることができる時間やその内容は限られている。したがって、各校の実情に合わせて適した活動プログラムを作成することが望まれる。

7 成果と課題

(1) 成果

- ① 異学年交流活動を通して、友達から頼られたり、認められたりする喜びを実感でき、6年生の自己有用感を高めることができた。
- ② 自己有用感を向上させるために有効な活動内容を見出し、異学年交流年間活動計画などを作成することができた。
- ③ 異学年交流活動を継続的に展開していく中で、子どもたちはさらに多くの友達と触れ合いたいという意識を持つようになってきた。つまり、自己有用感の高まりにより下級生や同級生との関係が深まり、共に活動しようとする意欲が向上した。

(2) 課題

- ① 異学年交流活動について全教職員が共通の理解を持ち、教育課程へ適正に位置づけなければならない。
- ② 子どもたちの実態に即した活動計画の作成、活動内容の充実を図らなければならない。
- ③ 異学年交流活動を効果的に展開するには、特別活動をはじめとして他の教科や領域との関連を図りながら進めることが大切である。

8 おわりに

子どもたちは、楽しく学びの多い学校を求めている。その願いを実現するためには、友達同士（同学年の友達、上級生と下級生など）が共に支えあい、助け合う仲間関係を育てていかねばならない。

本研究においては、自己有用感を高めるための効果的な異学年交流活動プログラムを明らかにすることができた。しかし、自己有用感の向上は、異学年交流活動だけでなく、その他の様々な学習場面や生活場面でもたらされるものであることは言うまでもない。

今後も、本研究の成果が子どもたちの自己有用感の向上に結びつくよう、学校現場での実践を重ねていきたい。

〔参考・引用文献〕

- ・滝充著「ピア・サポートではじめる学校づくり 小学校編」金子書房（2001年）
- ・森川澄男編著「学校でのピア・サポートのすべて」ほんのもり出版（2001年）
- ・菱田準子著「すぐ始められるピア・サポート指導案&シート集」ほんのもり出版（2002年）
- ・國分康孝著「エンカウンターで学級が変わる 小学校編」図書文化社（1996年）
- ・プロジェクトアドベンチャージャパン著「グループの力を生かす」CSL学習評価研究所（2005年）
- ・高知県教育委員会「ピア・サポート活動参考資料」（平成14年3月）